ひとりっこ

独生子女

爆発する中国人口
最新レポート

莫邦富

Mo Bangfu

独生子

ひとりっこ

爆発する中国人口
最新レポート

莫邦富

河出書房新社

莫　邦富(Mo Bangfu)
1953年、中国上海市生まれ。博士課程修了。来日前は大学講師。1985年、来日。現在、新聞・雑誌の連載やＴＶのドキュメンタリー番組製作などで活躍。
主な訳書・著書、開高健『パニック』(中国青年出版社)、町田甲一『日本美術史』(上海人民美術出版社)、菊田一夫『君の名は』(共訳、江蘇人民出版社)、西本鶏介『日本の民話』(共訳、湖南人民出版社)など多数。『世界文学家大辞典』(四川人民出版社)、『外国人名辞典』(上海辞書出版社)の主要執筆陣の１人。
主な取材・製作番組、ＮＨＫスペシャル「チャイナタウン――激増・新移民」「独生子女――中国・人口抑制政策をみる」、ＴＢＳニュースの森等の中国関係の特集など。

独生子女――爆発する中国人口最新レポート
©1992 Printed in Japan
1992年２月５日　初版印刷
1992年２月15日　初版発行
著　者　莫　邦富
装幀者　渋川育由
発行者　清水　勝
発行所　河出書房新社
東京都渋谷区千駄ヶ谷2-32-2
電話　(03)3404-8611〔編集〕　(03)3404-1201〔営業〕
振替　東京 0-10802
印　刷　暁印刷株式会社
製　本　大口製本印刷株式会社
定価はカバー・帯に表示してあります。
落丁・乱丁本はおとりかえいたします。
ISBN4-309-22212-9

目次

第一章　人口政策に失敗した中国
衝撃のレポート　馬寅初の指摘
中国共産党の政策の誤り　7

第二章　中国全土を席捲する「盲流」
一九八九年三月はじめ　増大する農民の経済的負担
氾濫する「盲流」人口　「超生ゲリラ」の実態
「盲流」者をキャッチボールする各省の事情　25

第三章　暴徒化しつつある過剰人口
「豊かになれる人間から先に豊かになれ」
多発する「鉄道ゲリラ」の犯罪
列車内犯罪に走る農民や都市の失業者たち
新・旧農民の対立　古墳を盗掘する農民
金鉱に群がる暴徒農民　47

第四章　想像を絶する住宅事情
住宅問題に喘ぐ国民　住宅難に苦しむ知識人
明時代の老朽建物に住む北京市民　上海の住宅事情
都市部の住宅事情に隠された二つの原因　73

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第五章　二億人の出産を抑えた「一人っ子」政策 ―― 91
中国共産党の対応　「一人っ子政策」のスタート
出産割り当て制度の実態　都市部で実施される一人っ子政策
共産党員・共産主義青年団員の献身的な努力
急増する人工中絶

第六章　骨抜きにされつつある人口抑制政策 ―― 117
封建思想との相剋　一人っ子政策に反対する農民
男の子を欲しがる農民　党幹部や医師の犯罪
女の子誕生の悲劇　跡を絶たない捨て子
男の子にこだわる理由

第七章　親の期待に喘ぐ一人っ子たち ―― 147
一人っ子政策の産物、「小皇帝」
高価なピアノが招いた悲劇　教育に盲目的な親たち
文化大革命の黒い影　一人っ子と親の歪んだ関係

第八章　少年工 ―― 173
「黒孩子（ヘイハイズ）」と少年工問題　激増する小、中学校退学者
少年農民　少年兵　売春する少女
知識人差別が生み出したもの　少年工使用禁止規定

第九章　無視された教育と知識人 ―― 193
悲惨な知識人差別　減少する教師の給料　ブラック年齢
知識人を迫害した文革の結果　世界最低レベルの教育予算
危険な老朽校舎　最弱者の「小皇帝」
第十章　避けられない人口輸出と頭脳流出 ―― 215
人口輸出の可能性　就学生の名を借りた人口輸出
過熱する「出国ブーム」　訪日留学生の歴史
相次ぐ頭脳流出　帰国を拒否する留学生たち
長編小説『黄禍』の予言
第十一章　世界に貢献する中国の人口抑制政策 ―― 241
中国の置かれた位置　女児「間引き」の現実
揺れ動く政府・党の対応　中国国内に存在する南北問題
残された最後のチャンス　今後の人口推移
参考文献 ―― 262
あとがき ―― 266

独生子女（ひとりっこ）

――爆発する中国人口最新レポート

第一章

人口政策に失敗した中国

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

衝撃のレポート

中国語の四文字熟語に「触目驚心」（目に触れるものはみな心を驚かせる）というのがある。中国最高のシンクタンク、中国科学院に置かれた国勢分析研究グループが、中国政府に提出した『生存と発展』と題するレポートを読み終わった時の私の気持ちは、まさしくこの四文字熟語でしか表現できなかった。

真実を割合と率直に話せた一九八九年六月以前に書き上げられたレポートは、こう告げている。

「二年前、国務院農村発展研究センターの委託で『中国国勢分析――農村の長期発展問題に関する研究』という課題を調査し始めた時、われわれは農村の美しい未来を描き、完全かつ効果的な政策を提案しようとした。しかし、「人口、資源、環境、食糧と経済発展について、総合的・長期的な分析を行った結果、中国が直面している困難な問題は、かつて考えられていたよりもはるかに重大かつ複雑であり、前代未聞の矛盾を解決し処理に当たることは、予想していたよりもむずかしく、しかも根治で

きる良薬がないことを認識するに至った」

中国の現状を克明に分析した結果、中国がとてつもない危機に瀕しており、このままでは近代化はおろか、地球からその球籍（戸籍）を抹消されてしまい、生存すらできなくなることが判明したと強調するレポートは、「中国を追い込んだ最も深刻な問題として人口、資源、食糧、環境の四つを取り上げている」。

この「四大難関」ともいうべき問題のうちでも最大の問題が、いうまでもなく過剰人口である。

一九九〇年七月に行われた第四回国勢調査による台湾、香港、マカオを除く中国の総人口は、一一億三三六八万人である。また、中国の人口政策を担当する政府内閣レベルの高官の発言によると「黒孩子（ハイズ）」（闇っ子）とも呼ばれる戸籍のない人口は、一五〇〇万人を数える。この要素をも考慮すると、中国の総人口はすでに一二億人近くに達している可能性がきわめて強い。

しかし、中国の国土は、これ以上の人口を負担できなくなりつつある。

前述『生存と発展』によれば、中国の経済力にふさわしい人口数は八億人であり、すでに四億人近くが過剰ということになる。また、中国の土地資源の負担能力から見た場合、負担できる人口は九・五億人が限界とされ、この計算でも二億人が過剰人口となってしまう。

中国近代化建設にとって、人口問題が最大の障害となっていることは一目瞭然である。

では、深刻な人口問題がうまく解決されない時、どういうことになるかという問題に対して、『生存と発展』は、まず、中国歴史上に起こった農民一揆を引用して論を展開している。たとえば明時代（一三六八～一六四四年）の白蓮教（びゃくれんきょう）一揆、清（しん）時代（一六三六～一九一一年）の太平天国（たいへいてんごく）革命を取り上げ

て、それらの農民一揆の原因として、社会制度の不公平や政府の腐敗などの要素のほかに、人口の急激な増加も一因になっていたことを指摘した。

「人口と資源とのバランスがいったん崩れてしまえば、飢餓、戦争、動乱が人口を調節するメカニズムとなる」としたうえで、「一八五一年、四・三億人あった総人口が、太平天国革命期間中の一八六三年には一気に二・三億人に落ちた」と歴史を振り返って見たこのレポートは、かつて毛沢東に痛烈に批判されたイギリスの経済学者マルサスの「人口論」とマルサス主義を想起させた。

人口の激増が太平天国革命の発生原因の一因になっているとの視点は、それまでの中国では考えられない新しさをもっている。

『生存と発展』の予測によると、二〇二〇年代頃に、中国では三つの人口ピークを迎えるという。すなわち、総人口は少なくとも一五億人となり、労働年齢人口は一〇億人、老齢者人口は三億人以上にそれぞれ増加するという三つの人口ピークである。

この三つの人口ピークが到来するまでに、経済を大いに発展させられず、かつ人口抑制政策を効果的に徹

中国一の繁華街といわれる上海市南京路。平日でも溢れんばかりの人、人、……。ここに中国人口問題の縮図を見ることができよう。

底させずに現状のまま推移した場合、
「大動乱が発生し、（中略）近代化の実現どころか、中華民族の基本的生存条件でさえも維持できず、中国は永遠に日の目を見られなくなってしまう恐れがある」
と、最大級の表現を使用して、厳しい警告を発したのである。
さらに、そのような状態のもとで三つの人口ピークを迎えてしまった場合、中国は「大規模な農産物輸入を迫られるか、あるいは世界各国に対し、大規模な人口輸出を行う以外、選択の余地はないだろう」と、レポートは結ぶ。

馬寅初（ばいんしょ）の指摘

では、中国の人口問題は、どうしてここまで深刻化してしまったのか、何故これまで解決の手を打たなかったのか、と誰もが素朴に考えるだろう。
中国科学院のレポート『生存と発展』は、この問題に対して、中国の人口成長史を振り返り、次のように指摘している。
「中国の人口成長は大きな増減を示す周期性をもって、循環している。歴代の封建王朝の初期には、土地が新しく配分され経済が繁栄し、社会が安定するため、人口が急激に増加する。いっぽう、封建王朝中期になると、人口増長が循環曲線のピークに達し、一人当たりの土地面積が最低点に落ち込む。さらに封建王朝末期は、人口規模が社会経済の負担能力を越えてしまい、重税などの原因が加わって、飢餓・疫病・戦争などが発生する。そのため、今度は人口が急激に減少する。総人口数も循環曲線の

最も低いところに落ち、やがて新しい循環が始まる」

この循環周期が各封建王朝の支配年数とほぼ一致していることは、暗示的である。人口は王朝興亡の加速器であり、動乱は人口の調節器であるといえよう。

このような特質をもつ中国の人口問題に関して、中華人民共和国建国早々、国内知識人の一部が中国政府および中国共産党に警告を発し、人口抑制政策の制定と実施を提案した。

北京大学学長(当時)で、著名な経済学者でもある馬寅初(ばいんしょ)は、その一人である。

数千年にわたる中国の歴史上、人口が丁寧に統計されたことはなかった。中華人民共和国建国頃の一九四九年、中国政府の最高責任者であり中国共産党主席であった毛沢東(もうたくとう)は、中国の人口を四億七五〇〇万人と見ていた(毛沢東「中国人民大団結万歳」『毛沢東選集』第五巻、人民出版社、一九七七年)。

しかし、一九五三年に第一回国勢調査が行われたところ、総人口はすでに五億四〇〇〇万人に達していたのである。一九五四年に国勢調査結果が公表された時、さらに六億人近くになった(前出『生存と発展』)。

一九五三年の国勢調査は、はじめて中国の人口について正確なデータを提供してくれたが、それは出生率、死亡率および人口成長率を表わしていない静的データでしかなかった。

五三年の国勢調査の欠陥を補うため、馬寅初は日本の国会議員に当たる全国人民代表大会代表の身分で、五五年と五六年の二度にわたって、浙江(せっこう)省、上海市に赴き、農村や上海国営第二棉紡績工場で人口成長率を丁寧に調査した。

新中国の人口成長率が一〇〇〇分の二二にも達しているというデータに驚いた馬寅初は、このまま

推移すると「一五年後、わが国の人口は九億三〇〇〇万人、五〇年後は一六億人となるだろう」（胡平・張勝友『東方大爆発』江蘇文芸出版社、一九八八年、および陸幸生「天下第一難」『収穫』第四号、一九八八年）と推計したうえで、「中国の人口は、このように無制限のままで成長していけば、間違いなく生産力の発展の妨げとなるだろう」（馬寅初「我国人口問題と生産力発展の問題」『馬寅初経済論文集』下巻、北京大学出版社、一九八一年）と警告した。

当時、社会学研究者費孝通、人口学者で清華大学教授呉景超、哲学博士陸欽範、学者陳達、人口学者李景漢、全国人民代表大会常務委員邵力子、中華医学会理事長鍾恵瀾ら、中国の著名な知識人も馬寅初の意見を支持して、人口抑制政策の制定を訴えていた。

しかし、一度は人口抑制を支持したことのある毛沢東ではあったが、政治闘争の観点から、早くも人口抑制論を批判する立場に変わってしまったのである。

一九五七年七月五日付の中国共産党機関紙「人民日報」は、同年六月に開かれた第一回全国人民代表大会第四次会議で行われた馬寅初の書面発言を「新人口論」と題して掲載したが、その二日後の七月九日、毛沢東は上海幹部会議の席上、「ブルジョア階級右派の攻撃を撃退せよ」という報告を行い、「全体的問題は、知識人が決定するのではなく、最終的に労働者が決定するのである。（中略）知識人というものは、もっとも知識をもっていないのである」として、馬寅初らを含む中国のすべての知識人を誹謗に近い形で非難・攻撃した（劉魯風・何流・唐玉芳編『中華人民共和国要事録一九四八―一九八九』山東人民出版社、一九八九年）。

新中国知識人の受難の歴史が、ここから始まったといえよう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com